

紀 要

第 20 号

2007. 3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

近江における縄文弥生移行期変容壺研究ノート

— 烏丸崎遺跡出土の変容壺を評価するための基礎作業 —

小竹森 直子

1. はじめに

弥生時代前期末～弥生時代中期初頭の玉造工房跡や弥生時代中期前半期を中心とする100基を超える方形周溝墓群が、昭和57年度～平成3年度までの10年間にわたる発掘調査当時から注目された草津市烏丸崎遺跡は、平成12年度から整理調査が始まり、筆者は平成17・18年度に担当者となり、多くの前任者の作業を引き継ぎこれらをまとめることになった。烏丸崎遺跡を評価するにあたっては、冒頭に述べたようにこれまで県内ではほとんど検出されていない石針が多量に出土した玉造りに関する視点、木偶像祀や主体部構造、群構成等の大規模方形周溝墓群に関する視点がメインとなることは確かであるが、縄文時代晩期終末～弥生時代前期の良好な遺構と包含層から出土した土器群にも、烏丸崎遺跡の評価に関わる注目すべきものがある。縄文時代から弥生時代への移行期に見られる変容壺である。

当該期の変容壺は、その出現・展開に地域における縄文文化と弥生文化の受容・選択の在り方が反映していると考えられている。特に、烏丸崎遺跡出土の変容壺の中には、これまでに他地域では見られない類型が存在する。したがって、これを分析・考察することは、烏丸崎遺跡の周辺地域や県内だけではなく、列島の視野で烏丸崎遺跡の縄文弥生移行期の評価に繋がるものと考えられる。

そこで、本文ではその基礎作業として烏丸崎遺跡出土の変容壺を個体資料として器形・調整・文様の手法から類型化を図り、関連資料との比較化への手がかりとする研究ノ

ートとして位置づけ、詳細データや縄文弥生移行期の烏丸崎遺跡の評価は、報告書¹⁾において提示するものである。

2. 変容壺について

作業を始めるにあたり、まず、これまでの研究成果²⁾に基づき変容壺とは何かを整理しておこう。

縄文弥生移行期³⁾とは、縄文時代晩期後葉の突帯文系土器群（畿内では船橋式・長原式）の時期から弥生時代前期の時期に相当し、そのアプローチは、西日本と伊勢湾周辺地域における突帯文期における壺形土器、北陸・関東・東北地方における大洞系・浮線文系期における壺形土器の認識とその系譜論に始まると言える。器形・調整・文様との関連性から頸部のくびれが強くなることで甕・深鉢からの変容形と口縁部が長くなることで浅鉢からの変容形に大別され、各地におけるその後の変容壺として展開するものは甕・深鉢変容壺を主体としている。また、その技術的・手法的系譜・系統の探求がなされており、突帯文系土器文化圏においては、北部九州に端を発する夜臼式・板付式・速賀川式の関与の度合い（在地上器の受容＝転換あるいは変容、拒絶）が、各地の土器文化における弥生文化の導入・受容の在り方を示すものと考えられている。

また、機能・用途の視点からもアプローチがなされている。壺形土器・変容壺に見られる二次焼成の痕跡は、甕・深鉢と同様の煮沸・調理具としての使用が認められ、壺形土器を規定する機能的特性である貯蔵するあるいは飾られた土器として、煮沸をその機能的特性とする甕形土器と機能分化していないと評価される。つまり、形態的には弥生系の要素が出現しているが、機能的には依然として縄文系の段階にあり、壺形土器としての機能分化の確立こそが、受容地における弥生化の定着段階を示すことになる。

では、各地にはどのような変容壺が存在し、どの様に変遷するのかを、本文に関わる畿内と伊勢湾周辺地域に限ってまとめておこう。

【畿内突帯文系】

畿内における突帯文系土器群の中での甕・深鉢変容壺の出現期は口酒井式段階に求められ、器形・調整・文様は長原式まで継続する。出現の契機については、2条突帯甕の平底化や浅鉢と壺の中間形（＝夜臼系）の存在等から、大筋では北部九州の影響によるものされる。口酒井式段階では、器壁内外面に炭化物の付着・残存による二次焼成が確認されるが、船橋式段階以降には基本的に見られないことから、当該期において壺形土器としての機能分化が確立したと考えられる。

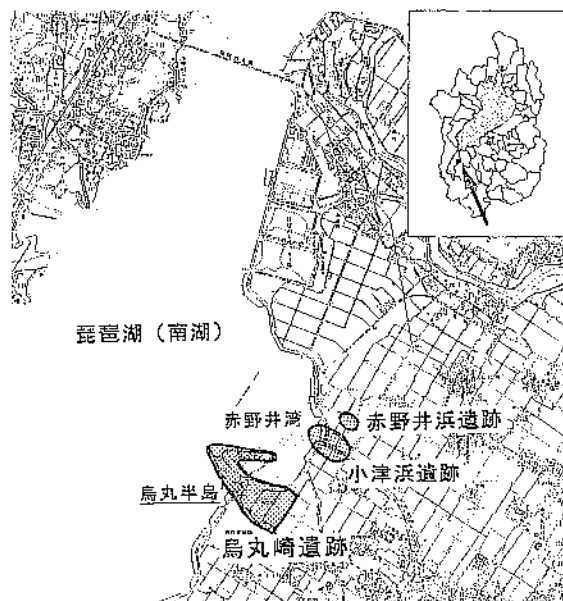


図1 烏丸崎遺跡

器形・調整・文様の特徴は、以下のとおりである。

口唇部⁶⁶：口酒井式・船橋式段階では面取りや刻目が見られるが、長原式段階では丸くおさめる。

口辺部⁶⁷：口酒井式・船橋式段階では口唇部からやや下位にD字形刻目文を加える断面台形・三角形の突帯、長原式段階では口唇部に接して頂点が下方に位置する三角形の断面を呈する突帯が巡り、突帯は無文あるいは、細かなD字形刻目文・棒状工具によるO字形押圧文・条痕・条線が残る二枚貝もしくは板状工具による刻目文が加えられる。

肩部：口酒井式段階には、D字形刻目文を持つ突帯が巡るが、船橋式段階以降は基本的には突帯は伴わない。

頸部調整：口酒井式段階では、横方向の二枚貝条痕、船橋式段階では横方向のケズリの後ナデ、長原式段階ではナデ・ケズリの後ナデ・ハケ状工具による条痕による。

胴部調整：口酒井式段階では、上位から底部周辺に向かって横方向―斜方向―縦方向のケズリ、船橋式段階以降では縦方向～斜方向のケズリあるいは条痕であるが、最上位にのみ横方向に施されるものが見られる。

底部：径の小さな突出気味の平底であり、側面が若干外方へ張り出す。

くびれ度⁶⁸：口酒井式段階は0.6前後、船橋式段階は0.4前後、長原式段階は0.3～0.4であり、時期が新しくなるほど頸部のくびれが強くなる。

二次焼成⁶⁹：口酒井式段階では認められるが、船橋式段階以降は基本的に認められない。但し、長原式段階にあたる滋賀県高島市弘川遺跡（図2-6-1）・北仰西海道遺跡（図2-5-1）において土器棺として検出したものには、二次焼成が認められる。

技術的・手法的な個々の要素は、基本的には甕・深鉢に求めることができ、共通性が極めて高いと言える。壺としての機能分化が確立した船橋式段階以降、長原系壺形土器（図2-7-1～4）とされ、肩部が大きく張り出してくびれの強い頸部は直立気味に延び、口唇部に至る形態を示す。また、肩部には突帯を巡らせず、口辺部の突帯のみの1条突帯に優位性がある。頸部と胴部の境を意識した調整も特徴であり、中には肩部が段状になるものも見られる。また、底部周辺の調整方向を変えることも特徴とされている。

【伊勢型・天保型】

伊勢湾西岸を主体とする甕・深鉢変容壺は、主体地における出土例が少ないが、三重県天保遺跡出土資料（図2-9-1）を基準として天保型あるいは伊勢型と称され、そ

の出現は突帯文Ⅰ期後半（五貫森式相当）に遡る。器面調整を二枚貝条痕とし、突帯について独自の特徴をもつものの、基本的には西日本の突帯文土器群と同調する傾向にある伊勢湾周辺地域における突帯文土器群における動きである。天保遺跡に近接する上箕田遺跡（図2-10-1）や尾張北部の馬見塚遺跡からは夜臼系変容壺が存在することなどから、その出現契機は西日本・畿内に通ずるものがあると考えられる。

その系譜は、遠賀川系が伴出する条痕文Ⅰ期（樫王式相当）まで継続し、条痕文Ⅱ期（水袖平式相当）前半までは二次焼成の痕跡も認められる。伊勢型の特徴の一つである二条突帯が消滅し、くびれ度の小さな形態のものに二次焼成が無くなり、波状文・羽状条痕によって飾られる土器として機能分化が明確化するのには、弥生時代前期終末～中期初頭にあたる条痕文Ⅱ期の後半である。

口唇部：突帯文期においては単純におさめるが、条痕文期には面取り、内面肥厚により上端に面をもつ。

口辺部：突帯文期には短く外反させ、口唇部から下位の屈曲部に素文低突帯を巡らせ、条痕文Ⅰ期には棒状工具あるいは指頭による押圧文を施す突帯を巡らす。

肩部：突帯文期には、二枚貝による押引文を加える突帯を巡らせ、条痕文Ⅰ期には棒状工具あるいは指頭による押圧文を施す突帯を巡らす。

頸部調整：横方向もしくは斜方向の二枚貝条痕である。

胴部調整：突帯文期には最上位は横方向のケズリが見られ、ほぼ全面が縦方向のケズリであり、条痕文Ⅰ期では、上半は横方向、下半は斜方向の二枚貝条痕である。

底部：径が小さい突出した底部であり、突帯文期には側面が張り出し気味である。

くびれ度：突帯文Ⅰ期には0.6～0.8であり、突帯文Ⅱ期には容量と共に幅が大きくなり0.4前後が一定量を占める。条痕文Ⅰ期には容量にはかなりの幅があるものの、くびれ度は0.4～0.6に集約する傾向にあり、条痕文Ⅱ期以降には0.35前後となる。

二次焼成：条痕文Ⅱ期後半には、50リットル前後の大型品には二次焼成が認められなくなる。

形態的には長原系とは異なり、くびれ度の大きい甕・深鉢と壺の中間形を呈する特徴は、特に突帯文期には顕著である。また、長原系では1条突帯が優位形であるのに対して、伊勢型では二条突帯を特徴とする。形態的には長原系壺形土器と同じくくびれが強くと頸部が直立し、口辺部に複数条の素文低突帯が巡るものが、愛知県山中遺跡（図2-12-1）などで存在するが、これについては、伊勢型をはじめとする在地系突帯文系とは異なり、長原系とされている。

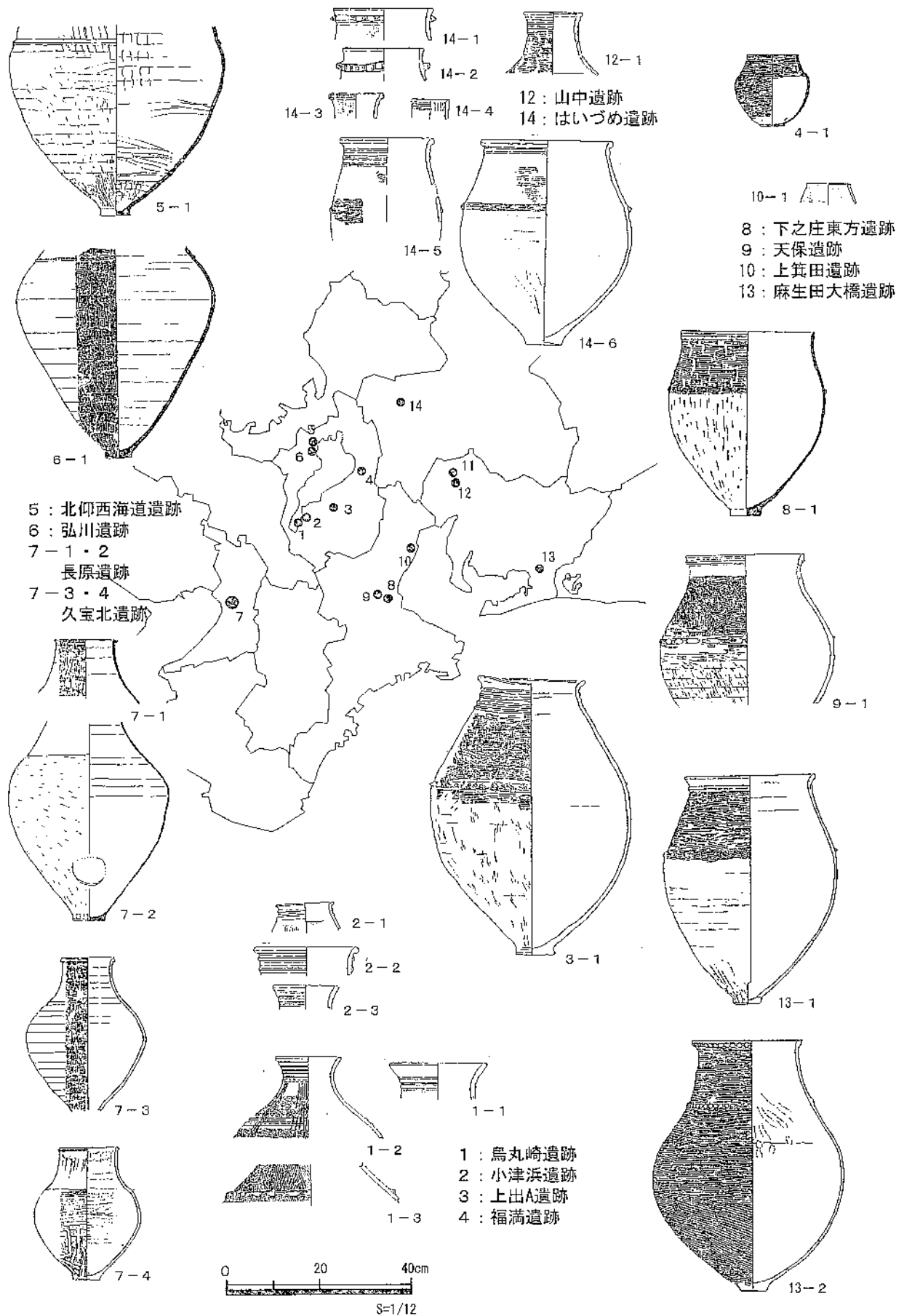


図2 近江及び周辺地域の変容壺

【その他の伊勢湾周辺地域の変容壺】

甕・深鉢変容壺ではあるが、伊勢型とは異なる複数の類型が想定されるものの、形態的にはバリエーションの幅が著しい。形態・文様・調整の指向性を大別すると、以下の3グループ程度にまとめることができる。

1 条突帯系：素文低突帯を口辺部にのみ巡らせる。頸部は横方向のミガキ、胴部は斜方向～縦方向のミガキで調整する。

条痕無文系：突帯を伴わず、器壁全面を条痕あるいはケズリで調整する。頸部と胴部でその方向をかえるものも見られるが一様のもが多く、長原系と比較すると頸部と胴部の境の意識は極めて低い。

条痕加飾系：所謂、水神平式の条痕文系壺である。条痕文Ⅱ期前半では、頸部直立気味に短く立ち上がるのに対して、後半には頸部の締まりが強まり口縁部を大きく外反させる。口唇部に接して押圧文を加えた突帯が巡り、前半期では頸部～胴部は横～斜方向の条痕であるのに対し、後半期には頸部には調整具により直線文・波状文が施され、胴部は羽状条痕により加飾性の高い壺となる。

頸部の締まりが強くなり直立して長く延びる頸部の口辺部に押圧文を加える突帯を巡らせる一群については、条痕文期における長原系壺型土器として位置づけられている。

3. 烏丸崎遺跡出土変容壺の検討

琵琶湖の南湖東岸に突出した烏丸半島に展開する烏丸崎遺跡は、縄文時代晩期終末～弥生時代中期に烏丸半島の北側に位置する赤野井湾周辺に展開する集落・墓域・生産域で構成される遺跡群の一角を占めると考えられる。縄文弥生移行期の遺構としては、堅穴住居・土器棺を伴う土壇墓を含む土坑とこれら遺構面直上に形成され、当該期の遺物を含む包含層である。図化した約870点の縄文時代晩期終末～弥生時代前期を所属時期とする土器の内、長原系壺形土器と遠賀川系壺形土器以外の変容壺は21点である。口縁部のみ、あるいは肩部周辺のみ的小片が多く、全形を把握できるものはなく、深鉢との峻別が困難である底部のみの破片についてはカウントしていない。21点の内、条痕調整のみの小片を除く19点が検討対象となる。

各資料の観察は、技術的系譜に繋がる器形・調整・文様の特徴を抽出する。各変容壺との比較をするために、前章と同じく口唇部・口辺部・肩部・頸部調整・胴部調整の項目毎とし、機能・用途に繋がる二次焼成の有無についても重要な観察項目とした。頸部と胴部最大径部が共に残存する個体がほとんどないため、くびれ度は極めて少ない資料を対象とした推定値である。各資料の個別情報については、

報告書において詳細を記述することから、本文では、その観察を基づく類型化の方向性を示し、烏丸崎遺跡の変容壺の特質を代表する資料を提示するにとどめる。

長原系(図4-1～3)・遠賀川系壺形土器(図4-16～18)との峻別による変容壺(図4-11～13・15)の抽出は、①口辺部～肩部への施文とその文様構成及び施文手法②二枚貝あるいはハケ状工具による器面条痕調整③胎土・焼成の違いによって、比較的簡易にかつ明瞭に行うことができる。特に①に留意し、烏丸崎遺跡での変容壺の技術的属性を、下記に列挙・整理する。

□ 唇部：単純に丸くおさめる。

□ 口辺部：形態的には頸部から連続的に外反させ、口辺部には

- a. 素文低突帯
- b. 断面波板状を呈する凹線状ナデ
- c. 棒状工具による太くて深い沈線
- d. ヘラ状工具による深い沈線

が複数施される。a・bでは、仕上げのナデと共に口辺部を周回するが、c・dでは、複数回に分けて断続的に施されている。各条の沈線の始点・終点は揃っており、残存する空白(無文)が縦位文様に近似した視覚的効果を持っており、頸部縦位直線文が間欠する無文部分から始まるものがある(図4-12)。

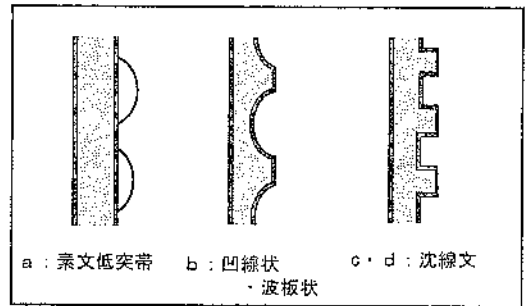
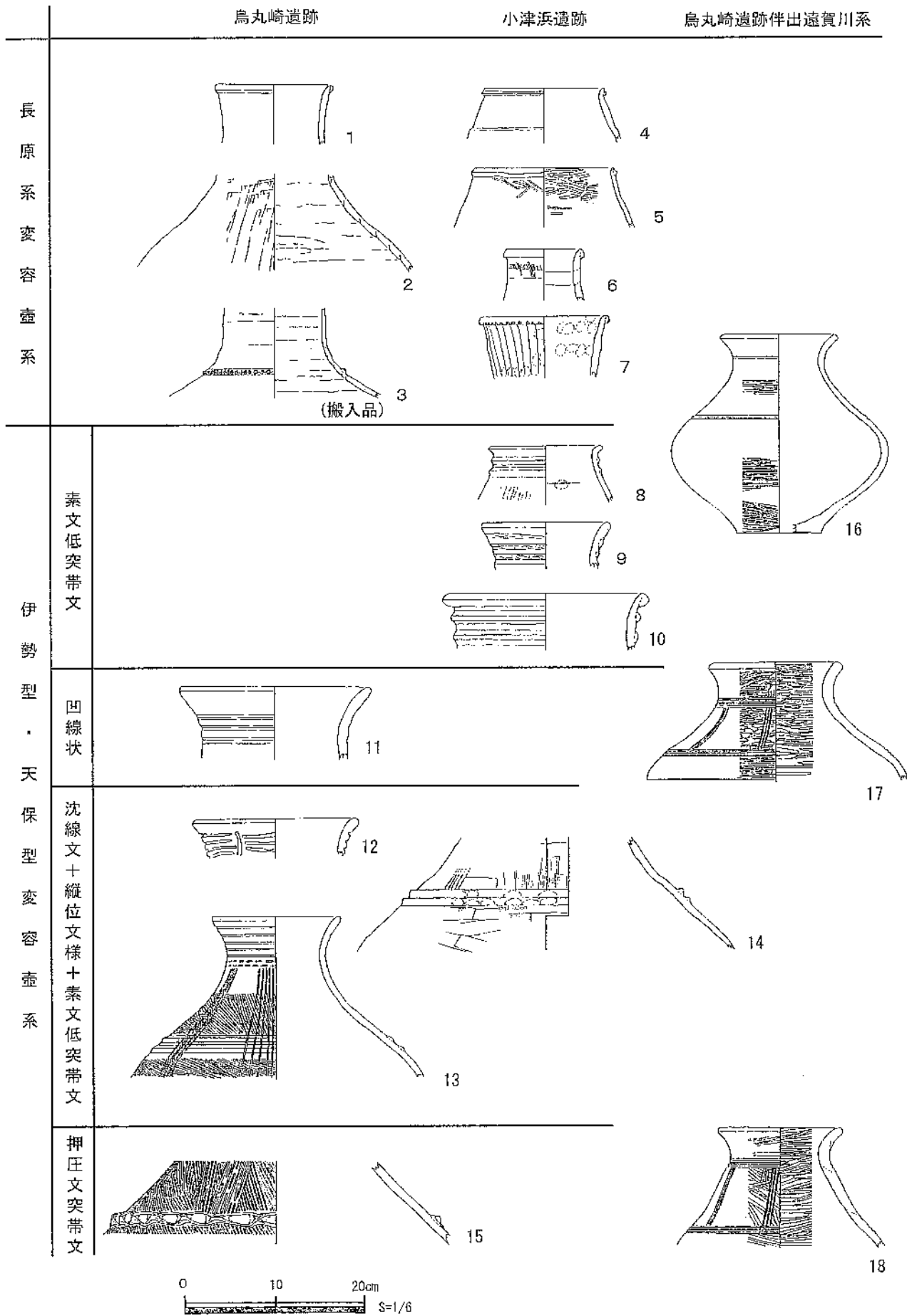


図3-1 断面に現れた施文手法の差

a 直線文	
b 直線文 + 断続直線文	
c 断続直線文	

図3-2 縦位沈線文の文様構成パターン



0 10 20cm S=1/6

図4 烏丸崎遺跡・小津浜遺跡出土の変容壺

頸部：口辺部文様帯から肩部までの頸部にも、縦位（垂線）沈線による

- a. 数条程度の直線文
- b. 直線文の間に1列～数列の断続的な直線文²⁴で埋める
- c. 断続直線文

を4～数カ所に施す。沈線は、遠賀川系ヘラ描沈線文と比較すると太くて、その痕跡は深い。口辺部でも指摘したように、沈線断面にわずかながら丸みが残る太い沈線は棒状工具、沈線幅が狭く深く刻み込まれる沈線はヘラ状工具と考えられる他、厚み5mm前後の板状工具で浅く引かれた断続直線文も見られる。断続直線文については、口辺部文様帯直下に2段施す例（図4-13）がある。

肩部：突帯が伴い、その形状・手法には、

- a. 素文低突帯2条
- b. 強いナデによる凹線状・断面波板状文様2～3条
- c. 指頭による押し気味の押圧文を加えた突帯1条（図4-15）

の4種の存在が確認できるが、口辺部・頸部文様に使われる太い沈線文は認められない。また、口辺部の手法と肩部突帯の手法が必ずしも一致するとは限らず（図4-13）、肩部には素文低突帯を含む突帯を巡らせるという意識が高いと考えられる。

頸部調整：口唇部～口辺部文様帯と同じくナデ調整によって平滑に仕上げたものと、縦方向～斜方向の板状工具・ハケ状工具・二枚貝による条痕に大別される。

胴部調整：縦方向～斜方向の条痕を基調とするが、肩部突帯直下が横方向になるもの、底部周辺のみが横方向に変化するものが見られる。

底部：確実に変容壺に伴うと判断できる底部資料は1点のみであるが、径が小さく内面と共に突出し、底面は平坦ではなく若干の丸みを帯びる。

くびれ度：計測及び推定可能な資料は3点であるが、いずれも0.35前後になり、伊勢湾周辺地域における突帯文期の数値ではなく、条痕文Ⅱ・Ⅲ期と近似した数値を示す。

粘土接合：肉眼観察によって判別し得た資料に限定されているが、長原系壺形土器では搬入品・在地産共に内傾接合であるのに対して、条痕調整の変容壺では内傾接合・外傾接合が混在する。

二次焼成：土器棺として検出した肩部～底部の資料では、面に薄くススが付着し、内面にはコゲと

なった炭化物の付着が良好に残存している。また、頸部～口辺部内面にスス状炭化物の付着が認められる資料が1点あり、その他については磨滅が著しいこともありその痕跡は確認できない。しかしながら、主として口辺部の破片であることから、二次焼成痕をとどめる変容壺の出現頻度をこれによって求めることはできないが、煮炊きする壺の段階を脱却はしていない段階であると判断する。

胎土：在地産の遠賀川系土器の胎土と比較すると1～2mm大の砂粒が主体となっていることから、全体的に粘性が低くザラついた印象を受け、伊勢湾周辺地域の条痕系土器との近似性が強い。肉眼観察ではあるが、在地産遠賀川系と同じ茶褐色～暗赤褐色を呈する砂粒が含まれるものと、これがなく雲母細片が含まれる2種が存在する。

焼成：茶褐色を呈して硬質な1点を除き、淡灰褐色系の色調を呈し、器壁内部は黒灰色を呈している。胴部資料には、黒斑が認められるものもある。

所属時期：土坑において伴出した遠賀川系土器から、弥生時代前期中段階～新段階には、両者が共存していたと考えられる。

上記の様に、個々の要素において変異の幅がかなり存在することは否めないし、口辺部については沈線文への変化が見られ、素文突帯・2条突帯＝伊勢型変容壺の系譜上にある可能性は高いと言える。一方では、口辺部の多条素文突帯や沈線文を施す傾向は、山中遺跡出土の口辺部に多条素文突帯を施す長原系に通じる。また、外反する口辺部から大きく張る肩部に移行する上半部の器形は、同時期の在地産遠賀川系壺形土器に近似する²⁵。したがって、単一の系譜上における変容ではない、とも言える。このことを考慮し、上記特性を有する烏丸崎遺跡出土の変容壺については、〈変容壺〉として表記し、その他の変容壺と区分する。

4. 近江内における比較資料の検討

〈変容壺〉の在り方を考える上で、近江内での比較資料となり得るのが、烏丸崎遺跡と同じ烏丸半島・赤野井湾遺跡群を構成する守山市小津浜遺跡と湖東地域に位置する安土町上出A遺跡出土の資料である。ここでは、2遺跡における変容壺を烏丸崎遺跡の〈変容壺〉と関係性から検討する。

【小津浜遺跡出土の変容壺】²⁶

小津浜遺跡では、浅鉢変容壺（＝夜口系）・長原系と共に弥生時代前期中段階～新段階を所属時期とする伊勢型系とされる変容壺が出土しており、ここでは後者についての

み取り上げる。

全形を把握できる資料はないが、他の変容壺と峻別し得る最も明確な特性は、口辺部に見られる多色素文突帯である。形態的には、a：口辺部を短く外反させ頸部の締まりが弱いもの（図4-8）、b：外反するもの（図4-9・10）に大別できる。また、c：肩部に2条の断面三角形無文突帯²⁶、頸部に縦位の沈線文を施し、頸部を縦方向、突帯文直下を横方向の板状工具によるナデによって調整するもの（図4-14）が存在する。aについては、形態的に深鉢との中間形を呈しており、bについては素文突帯が〈変容壺〉よりも形状・手法的に明瞭である²⁷ことからこれに先行する可能性があり、cについては形態及び施文構成の面から烏丸崎遺跡の〈変容壺〉との関連性が高いと判断できる。

【上出A遺跡出土の変容壺】²⁸

上出A遺跡は、木棺墓・土器棺墓によって構成される突帯文期～弥生時代前期の墓域であり、突帯文深鉢を主体とする土器棺の中の5点の変容壺が対象資料となり得る。

長原式期～弥生時代初頭を所属時期とする図5-3は、砲弾形の胴部最大径部のやや上方から外湾気味に頸部が締まりながら延びる形態を呈し、底部は若干突出する平底で

ある。曲線の変換点にあたる肩部にはハケ状工具による押し文が加えられた突帯が巡り、頸部は横方向のハケ状条痕、胴部は横方向のケズリの後、底部周辺には縦方向、中位部には大まかなミガキで加えられている。粘土紐は内傾接合であり、胎土は他の在地性の高いものを使用し、二次焼成が認められる。肩部突帯や頸部調整・二次焼成の痕跡は突帯文Ⅱ期の伊勢型に近似し、胴部形態・調整については長原系に共通する。

短く口辺部が外反し、これによって形成される頸部に4条の素文突帯、肩部にハケ状工具による押し文を加える突帯を巡らせ、頸部は横方向のハケ状条痕、胴部は縦方向のケズりで仕上げる図5-4では、くびれ度が0.48となり突帯文Ⅱ期後半の麻生田大橋遺跡出土伊勢型変容壺よりも頸部の締まりが強くなっていることから、これに後出すると考えられる。胎土は在地産と異なり、胴部下半内面には炭化物の付着が見られる。この土器棺の蓋として使用されている変容壺は、丸く張る胴部を持ち、肩部に2条の断面三角形無文突帯を巡らせる。全体に横方向～斜方向のハケ状条痕を施した後、頸部には方向のミガキが加えられている。形態的には異なるものの、肩部に施される2条の断面三角形突帯については、小津浜遺跡出土のc形態（図4-

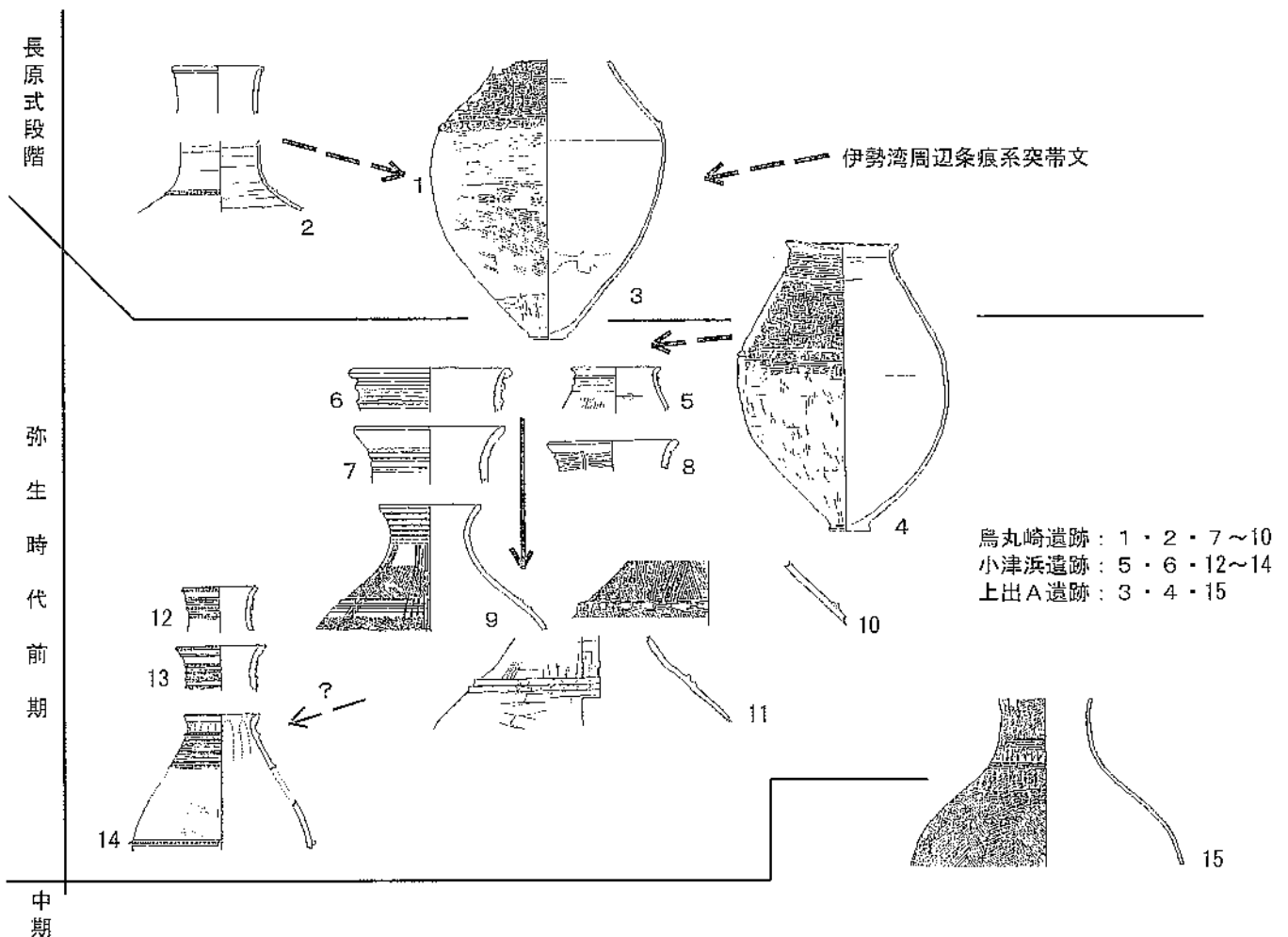


図5 烏丸崎遺跡・小津浜遺跡・上出A遺跡出土変容壺関係モデル図

14) と共通する。

図5-15は、頸部に布目圧痕を残す刻目文を持つ貼付突帯が1条巡る弥生時代前期新段階の壺形土器と共伴するもので、頸部に条痕工具による直線文・波状文、胴部を羽状条痕によって飾られる加飾条痕系（水神平式系）の変容壺である。伊勢湾周辺地域の特徴の一つである押圧文を加えた突帯が巡る口縁部の有無は不明だが、形態的にはむしろ小津浜遺跡出土の〈変容壺〉に近いといえる。在産とは異なる胎土で製作されていることから、搬入品である可能性は高いが、水神平式主体地の胎土とも異なることから、そこを直接的な供給地であるとは判断し難い。

以上に図示した上出A遺跡の3点からは、長原式期：長原系+伊勢湾周辺突帯文系（図5-3）→弥生時代前期初頭（？）：伊勢型（図5-4）→弥生時代前期終末：水神平式系（図5-15）の時間的な変遷を進ることができる。これを軸線の一つとして烏丸崎遺跡と小津浜遺跡の〈変容壺〉を見てみよう。まず、小津浜遺跡の口辺部a形態（図5-5）については、口辺部周辺のみでの比較ではあるが、上出A遺跡出土の伊勢型（図5-4）と近似している。他方、小津浜遺跡の口辺部b形態（図5-6）は伊勢湾周辺地域における多条素文突帯を伴う長原系変容壺との関連性や口辺部の外反傾向の萌芽等から、小津浜遺跡口辺部a形態・上出A遺跡伊勢型よりも後出あるいは、より長原系・遠賀川系の影響が強い、ということになる。烏丸崎遺跡の口辺部施文c手法（図5-8）・d手法（図5-9）をこれと比較すると、a・b手法を含めて素文低突帯の形態化として理解すれば、口辺部の外反が明瞭になり、頸部の締まりが強くなる現象と併せて、小津浜遺跡の一群よりも形式論的には新しい要素を多く備えていることになる。

したがって、2条突帯文系とも言えるこれら3遺跡の変容壺は、図5-3（上出A遺跡）→4（上出A遺跡）・5（小津浜遺跡）→6（小津浜遺跡）→7（烏丸崎遺跡）→8・9（烏丸崎遺跡）と変遷すると考えられる。また、技術的・文化的な系譜については、同じ突帯文系ではありながらそれぞれが独自性を有する西日本と伊勢湾周辺との両者に求めざるを得ない。長原系については生駒西麓産の搬入品を含め近江に定着し在産産されており、伊勢湾周辺地域の突帯文系（五貫森式・馬見塚式）～条痕文系（榎王式・水神平式）においても壺・甕・内傾厚口鉢が主として搬入品として存在することも明らかであり、一部の手法については在産に受容・定着している現象からも、近江を挟む東西の地域の両方からの影響を受けていることは否定できない。むしろ、遠賀川系を含めた形態的・技術的及び機能的な関連性の強弱や指向性あるいは個別要素の表出の仕方を理解すべきであり、その意味では、各地域・系譜の変容壺が主体地における形態・手法・用途をそのまま受容するのではなく、長原式段階においてはその中間・折衷形、弥生時代前期中段階～新段階には形態的には遠賀川系壺形

土器、施文・調整技法としては伊勢型変容壺との関係性の高さを示している。その中で、頸部への縦位沈線文による施文は、近江地域（琵琶湖東岸地域）における変容の独自性を示すメルクマールとなる可能性は極めて高く、その出現をもってして伊勢型とは区別すべき新たな類型の基準として〈変容壺〉が位置づけられよう。

用途的には、少なくとも弥生時代前期中段階の〈変容壺〉には依然として煮炊き使用を示す二次焼成痕が認められることから、壺としての機能が未分化であると考えられることもできるが、烏丸崎遺跡をはじめとして当該期の近江においては器種・機能分化が明確な遠賀川系土器群が主体であり、〈変容壺〉はあくまでも量的・質的に客体的存在である。したがって、生活様式における壺の用途にみる弥生化は、土器様式の転換と同時に受容されていると理解されるが、転換ではなく変容することで共存していた〈変容壺〉にまで波及していない意味を検討しなければならない。頸部を区画するような縦位沈線文は、烏丸崎遺跡において伴出する遠賀川系壺形土器においても認められる（図4-17・18）るが、その関係については検討を要する。また、口辺部～頸部に多条貼付細突帯を巡らせる直口・長頸系壺形土器（図5-12・13）や多条沈線文との組み合わせで構成される文様ではあるが、頸部と胴部最大径部に貼付突帯巡らせて口辺部を短く外反させる広口壺（図5-14）については、形態的には〈変容壺〉からの影響が仮定できることから、〈変容壺〉のさらなる変容あるいは派生の痕跡も検討すべき項目である。さらには、烏丸崎遺跡をはじめとする近江内の縄文弥生移行期の各遺跡からは、北陸～中部地域、さらには関東・東北地域との関連性を示す網浮線文系土器が出土していることから、その動向についても同じレベルで検討する必要がある。

5. 最後に

本文は、あくまでの報告書執筆前段階における視点の整理であることから、実際には資料毎における諸属性は極めて多様であることを認識した上で、単純化・パターン化による1つの仮想モデルを示したにすぎないことは言うまでもない。したがって、烏丸崎遺跡の〈変容壺〉が近江（少なくとも琵琶湖東岸）の中で一つの類型として認定しうる存在か否かは、あるいはその適・不適についても十分に論じるには至っていない。

ところで、執筆中にふとあることが気になった。近江では、弥生時代前期終末に遠賀川系の通常のハケとも伊勢湾周辺地域の条痕とも異なる鋭く、深い条線を残すハケ状工具によって器壁全面の調整及び施文を行う甕形土器が出現し、弥生時代中期には文様パターンと弥生時代後期にも受け継がれる受口状口縁を確立する。この近江における在産系ハケメ土器群における器種分化と機能分化の過程に、縄文弥生移行期の変容壺と近似した現象が見られるのであ

る。成立当初は甕形土器のみであり、弥生時代中期中葉に広口壺との中間形の壺形土器が出現し、受口状口縁が確立する弥生時代中期後葉には、強く締まる頸部が直立気味に伸びる壺形土器の他に、甕形土器より若干頸部が長い、あるいは締まりが強い程度の差異しか認められない壺形土器が見られる。いずれの壺形土器も、二次焼成が認められる頻度が高く、煮炊きする壺と言える。また、ハケメ土器群では、壺形土器・甕形土器・鉢形土器の文様構成・手法の斉一性と加飾性が高く、「煮炊きする飾られた甕」が存在することになる。これらの現象面的類似性を、一概に同じ原則・理論に基づいて評価することは忌避すべきであり、その方向に進むつもりもないが、各時期における土器製作・文化に見る在地化とは何か、受容・変容とは何かを考えるうえでは、対比する素材・現象としてはおもしろいのではないか、と思った次第である。

いずれにしても、本文における検討作業・モデルなどについては、精度を高めると同時により広い視野に立って、烏丸崎遺跡の評価に繋げたいと切に思うばかりである。

(こたけもり なおこ：調査整理課 主任)

註

- (1) 平成19年度刊行予定
- (2) 数多くの報文・論文・著作があるが、本文については下記に掲げる佐藤由起男氏・永井宏幸氏の著作・論文から多くのことを得た。特に、土器の諸属性の分類・指標等は、佐藤氏による土器観察の成果に依るところが大である。
佐藤由起男「第2章 伊勢湾周辺地方における壺形土器の確立過程」 「第3章 壺・深鉢変容壺をめぐって」 『縄文弥生移行期の土器と石器』 雄山閣出版 1999
永井宏幸「弥生時代前期の諸問題—三ツ井遺跡からの検討—」 『三ツ井遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第87集 愛知県埋蔵文化財センター 1999
- (3) 本文中で使用する型式名・時期区分及び併行関係については、別表の通りとする。

畿内・近江地域	伊勢湾周辺地域	佐藤氏論文時期区分
船橋式	馬見塚F式 五真森式	突帯文Ⅰ期—1 —2
長原式	馬見塚式	突帯文Ⅱ期—1 —2
弥生時代前期古段階	榎王式	条痕文Ⅰ期
前期中～新段階	水神平式 朝日式	条痕文Ⅱ期—1 —2
弥生時代中期前葉	岩滑式	条痕文Ⅲ期

別表 関連地域併行関係対応表

※佐藤氏時期区分及び伊勢湾周辺地域との並行関係、は前掲註(1)による

- (4) 口縁上端を示す。

- (5) 一般的には口縁部と称するが、佐藤氏論文との整合性をとるために、本文では口辺部と称する。
- (6) 頸部最小径/胴部最大径によって求められる数値であり、度数が大きい(1に近い)ほど頸部の締まりは弱く、度数が小さいほど締まりは強くなることを表す。
- (7) 基本的には煮沸容器として使用された際に、土器の内外面に付着するスス状あるいはコゲ状の炭化物が付着している状態を示すものであるが、葬送祭祀に伴う加熱処理が想定されることもあり、佐藤氏論文の用語使用例を準用する。
- (8) a手法の素文低突帯文については、器面に粘土紙を貼付、ナデによって断面蒲葺状に仕上げるていることから、器面よりも突帯が突出しているし、複数状を連続させた場合には断面では器面より突出した波板状を呈する。これに対し、器面に強いナデを周回させて凹線状することにより断面を波板状に形成するb手法では、視覚的にはaと近似した効果を生み出しているが、「突」帯でも貼り付けでもない。また、その中間的形状を示す極めて不明瞭な突帯も見られるが、あくまでも「貼付・突帯」を堅持していると判断されることから、ここではあえて細分していない。
- (9) 口辺部文様帯から肩部突帯上を突き抜ける沈線文で構成される縦位文は、その始点である口辺部から肩部突帯文周囲の終点までの一気に描くもの(2~数回に分けるものもあるが、基本的に1本の直線を意図したものであると判断できる場合はこれを含む。)を直線文とし、長さ数mm~1.5cm程度の短い直線を破線状に連続させるものを断続直線文と表記する。断続直線文は、視覚的に刺突列点文に近似した短小なものも見られるが、「突き刺す」よりも「引く(描く)」意識が強い。
- (10) 湖南地域における弥生時代前期の遠賀川系壺形土器の内、図4-13の〈変容壺〉と比較し得るのは所謂広口壺類である。その形態には多様性があることから一括することはできないが、概ね上半部は強く張り出す胴部最大径部から外湾気味に肩部~頸部が続き、口縁部は短く外反させ、下半部はあまり高さを有しない傾向にあり、全体としては扁平な横幅が強調される扁平な形状である。本文中にもあるように上半部については口辺部の長さや形状に差異はあるものの近似した傾向にあるが、下半部について〈変容壺〉では突帯文深鉢や条痕文系変容壺と近似した高さのある砲弾形になることから、調整手法と併せむしろ突帯文系・縄文系その類似性が高い。なお、くびれ度については、遠賀川系広口壺では0.4~0.45程度の数値を示すことから、〈変容壺〉よりも遠賀川系壺形土器の方が頸部の締まりは弱い。
- (11) 出土遺物の観察所見・所属時期等については、下記報告書の内容に基づく。
伊庭 功ほか『小津浜遺跡』 琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書6 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2002
- (12) 近接して断面三角形を呈する2条の突帯を巡らせているため、断面M字形と表現されることもある。2条1組・無文を基本とし、肩部に突帯の意識は伊勢型の系譜として捉えられるが、

その手法としては素文低突帯系・条痕文系とは異なり、むしろ遠賀川系の貼付突帯と近似する。

- 03) 出土遺物の観察所見・所属時期等については、下記報告書の内容に基づく。また、該当資料の胎土については科学分析が実施されており、その成果に基づく。

中村健二ほか『土出A遺跡』県営かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書16-2 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2001

図版資料出典・参考文献

滋賀県守山市烏丸崎遺跡(図2-2-1~3、図4-4~10・14、図5-5・6・19)

伊庭 功ほか『小津浜遺跡』琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書6 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2002

滋賀県蒲生郡安土町土出A遺跡(図2-3-1、図5-3・4・15)

中村健二ほか『土出A遺跡』県営かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書16-2 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2001

滋賀県彦根市福満遺跡(図2-4-1)

岩崎直也『邪馬台国出現前夜の近江』『滋賀考古』創刊号 滋賀考古学研究会 1989

本田修平『彦根市内遺跡分布調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告第10集 1986

滋賀県高島市今津町北仰海道遺跡(図2-5-1)

葛原秀雄ほか『今津町内遺跡発掘調査概要報告書(北仰北海道遺跡他)』今津町教育委員会 1989

滋賀県高島市今津町弘川遺跡(図2-6-1)

山口順子ほか『第4章 高島郡今津町弘川遺跡』『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅷ-3 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1981

葛原秀雄ほか『町内遺跡群発掘調査概要報告書』今津町文化財調査報告書第5集 今津町教育委員会 1986

大阪府長原遺跡(図2-7-1・2)

長島暉臣慎ほか『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告』財団法人大阪市文化財協会 1982

大阪府久宝北遺跡(図2-7-3・4)

寺川史郎ほか『久宝北(その1~3)』大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター

三重県下之庄東方遺跡(図2-8-1)

鈴木克彦『伊勢湾沿岸地方における凸帯文深鉢の様相』『三重県史研究』第6号 三重県 1900

三重県天保遺跡(図2-9-1)

田村陽一ほか『近畿自動車道(久居~勢和間)埋蔵文化財発掘調査報告』第3分冊6 三重県埋蔵文化財調査報告87-12 三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター 1991

三重県上箕田遺跡(図2-10-1)

新田 剛『上箕田遺跡』鈴鹿市教区委員会 1993

愛知県山中遺跡(図2-12-1)

服部信博ほか『山中遺跡』愛知県埋蔵文化財センター 1992

知県麻生田大橋遺跡(図2-13-1・2)

安井俊則ほか『麻生田大橋遺跡』愛知県埋蔵文化財センター 1991

前田清彦ほか『麻生田大橋遺跡発掘調査報告書』豊川市教育委員会 1993

岐阜県はいづめ遺跡(図1-14-1~6)

大参義一ほか『はいづめ遺跡』徳山ダム水没地区埋蔵文化財発掘調査報告書 水資源開発公団・岐阜県教育委員会 1989

愛知考古学談話会編『く条痕系土器』文化をめぐる諸問題』資料編Ⅰ 1985

愛知考古学談話会編『く条痕系土器』文化をめぐる諸問題』資料編Ⅱ・論考編 1985

突帯文土器研究会編『突帯文土器から条痕文土器へ』第1回東海考古学フォーラム・豊橋大会 1993

編集後記

本協会の紀要が今回で20号を迎えました。ようやく成人式を迎えたこととなります。これを機会に装丁を一新しました。

今回の紀要の内容は、時代区分では縄文時代から中近世まで、また、遺跡や遺構の評価や再検討を含め、遺物や資料の比較研究から考察に至るまで多岐にわたっています。いずれの論文にも、地域の歴史や文化の成り立ちと変容を解明しようとする熱い学究心が根底にあると信じております。

本書が文化財の保護のため、広く活用されることを心より願っております。

(編集担当 M. N.)

平成19年3月

紀 要 第20号

編集・発行 財団法人滋賀県文化財保護協会

大津市瀬田南大萱町1732-2

Tel. 077-548-9780(代)

<http://www.shiga-bunkazai.jp/>

E-mail: mail@shiga-bunkazai.jp

印刷・製本 三星商事印刷株式会社